

---

# 純情Bitchの放浪記

真黒くろすけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

純情Bitcchの放浪記

### 【Nコード】

N2494W

### 【作者名】

真黒くろすけ

### 【あらすじ】

思春期の悩みに苦悩する「僕」と帰る家を持たない彼女との愛の小劇

運が良かった。久しぶりに彼女と落ち合えたのは四国のはずれの境内で、彼女はちよつとやせこけた印象をうけた。近くのこじんまりとしたレストランでメニューのかたっぱしから頼んであげた。

「元気にしてた？具合は悪くない？」

「それはこつちのセリフだよ。どこで寝泊まりしてるの？」

「この近所に一人暮らしのおばあちゃんがいて、そこに泊めてもらってるわ。でもそろそろお暇しないと悪いわね」

そう言つて彼女は並べられた料理をちよつとずつつまみながらぎこちなくほほ笑んだ。久々に間近で見る彼女の笑顔に僕は子供みたいにそわそわした。

「少しくらいいいんじゃないか。最近ずっと野宿生活だったんだろ？」

「いいの、それはそれで楽しいものよ？ある時なんかノラネコちやんとずっと旅してたんだから」

そういう彼女は普通にしていれば丸の内のOLといつても不思議じゃない雰囲気、こんな生活をしているのがあまりに不似合いであった。

会計を済ませようとする彼女が伝票をかすめ取った。

「ここはお姉さんにまかせなさい」

お金がないはずなのにそんな無茶な。しかしさつさと席を立つた彼女はどういふわけか会計を済ませて戻ってきた。またか、と僕は問い詰めたが、彼女は一蹴した。

「裏技を使ったの。気にしないでいいわ」

一時の気分で何かをしでかしてしまうことがある。

かつて僕はそんな少年で、窓ガラスを割ることはもちろん下手すれば人を傷つけかねないような危ない真似を突拍子もなくやってしまうことがあった。

当然ながら周りの大人は僕に手を焼き、またその行く末を案じたけど、正直自分でもどうしてそんなことをしてしまうのか全然わからなかった。

何しろ僕の家は一族そろいもそろって証券会社や大手金融機関などの重役ばかりで、親も子育てに対してごく普通の神経をもっていた。家庭環境は恵まれていたし何不自由ない生活だったわけだ。

中学三年にあがるころに見かねた母が心療内科に僕を連れていった。

案の定先生はそれを反抗期ととらえ、その程度がはなはだしいのでしようと一応の結論をつけて経過観察を促した。しかしそれは反抗期というにはあまりに奇抜で不合理なもので（内容はひかえさせていただく）、周囲もどう対処したものかとひどく悩まされたようだった。

そんな中で唯一話をよく聞いてくれたのがその心療内科で助手をしていた人で、僕はなぜだかその人にだけは感じていることをうまく言葉に表わせたし、そうすることで気分が落ち着いたように思えた。僕はその人のことを先生より信頼できた。

半年くらいたったころ、その人は突然いなくなった。先生によると親御さんの病気が篤いとかで実家に帰るといふような書置きがあっただけで、なんの前触れもなかったそうだ。まさかなにか事件にでも巻き込まれたんじゃないかと心配もしたが、どうすることもできないまま時が過ぎた。

それからというものの、また僕は自分の情緒に泣かされ続けていたがなんとか高校生にはなれた。学校は都心があり、気の置けない悪友もできた。そんな時、僕は思いもかけずその人に出会うことになった。

そのとき僕は悪友たちとなんととはなしに興味本位で風俗の並ぶ路地裏をぶらついていた。冬枯れの街路は寒々しく、ちよつとばかり緊張と興奮をもって僕たちは盛り上がっていた。その一角の店の裏口から、その人は出てきた。

12月も末になるとみんな授業なんか聞いちゃいない。高校は冬休みを控えていて、年末どう過ごすとか、クリスマスがどうとかそんな話題で今年も終わろうとしていた。

窓辺の僕の席は少し寒い。外に目を向けるとほったらかしにされたようなグラウンドにはなんだか哀愁すら感じられた。

どうしたどうした、と赤沢が肩を叩いてきた。

「また元気ないなあ。だから俺の行きつけに連れてってやるって。な？」

彼は僕の数少ない友人の一人で、クラスでは上位に入るほどの秀才だ。そのうえなかなかの男前だと思うのだが、品行の下劣さで女子の大半に好かれていなかった。

「いや、また今度にしとくよ」

「つれないなあ」

彼は、優しい男なのだ。

僕は去年赤沢たちと風俗街を散策した時のことを思い出した。

そのとき僕たちは初めて見る社会の裏のようなその光景に一種の恍惚を感じて進んでいた。ピンクのネオンがやけに刺激的で、官能的だった。道行く人もどこか普通ではないような感じがし、知らない世界にさまよっているのだという感覚が次第に大きくなった。

「やつぱここらへん歩いてる女は店員で、男は客ってことだろ？」  
赤沢は神妙な面持ちでつぶやいた。

「まあ、その可能性は高いだろうね」

僕は目だけ動かし、その一種異様な雰囲気を観察しながら答えた。

その手の店の並びも終わりに近づいてきたころだった。自販機で買ったコーヒーを片手に赤沢が今後の行動計画を仲間に打ち明け、僕はそれを上の空で聞き流しながら今来た道を眺めた。

そのひとつの店の裏口にあたる場所から、その人は出てきた。僕の通っていた、心療内科の助手をしていた人だ。僕は固まった。たぶん、本人だ。その人は僕らの来た道へと去って行った。

「どうした？」

僕はなにか茫然とした、不気味な表情をしていたらしく、赤沢が声をかけてきたのにもすぐには気付かなかった。

「いや……別に」

「知り合いでもいたのか？」

その場は何とかとりつくろえたが、僕はひどく動揺していた。まさか、あの人が。何かの間違いなのではないだろうか。

その後、僕らは駅で解散した。駅の明かりは、いつも通りたった普通の代物だが、なんだか安心するものがあった。電車が来るまでしばし自分を忘れてしまい、いつのまにか自販機に頭をこすりつけてよりかかっていた。

家に帰るとどっと疲れを感じた。布団に横になり、部屋を豆電球だけ付けて薄暗がりの中で今日のことを思い返した。

そして猛烈に後悔した。どうしてしつと帰ってきてしまったのか。自分に腹が立った。

店から出てきた人は、本当にあの助手の人だったのか。確認すればよかった。仲間には適当に言い訳して、後から追いかけて行けばよかった。

しかし同時に怖くもあつた。もしそうだったら、どうしようか。僕はきつとその事実には落胆することだろう。あの人がそういう世界に通じているという事実には。

とはいえ、なんだというのだ。あの人の人生に文句をつけようという僕はなんなんだ。どうして僕はあの人にそうであってほしくないのか。

恥ずかしくも僕は鼻水を垂らして泣いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2494w/>

---

純情Bitchの放浪記

2011年10月9日14時58分発行